

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	加藤 弘孝（京都府）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	甲第 7 5 号
学位授与の日付	平成 2 6 年 3 月 1 8 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 2 項
学 位 論 文 題 目	『念仏三昧宝王論』の思想史的研究 ーその統合仏教思想に着眼してー
論文審査委員	主査 藤堂 俊英（佛教大学教授） 副査 福原 隆善（佛教大学教授） 副査 齊藤 隆信（佛教大学准教授）

〔 1 〕 論文の概要

本研究は唐中期の主として代宗の時代に、インド渡来の密教僧で四大翻訳家の一人に数えられる不空の高弟として活躍した飛錫の、長安仏教界において果たした業績を碑文資料を含めた遺文の上に明らかにしながら、現存する唯一の著作『念仏三昧宝王論』（以下『宝王論』と略）の思想史的解明に取り組んだものである。本論文の構成はつぎのようになっている。

序章	『念仏三昧宝王論』研究史
第 1 章	『念仏三昧宝王論』の撰述年代ー飛錫の事跡に関連してー
第 2 章	『念仏三昧宝王論』諸本の系譜についてーその流伝背景と関連してー
第 3 章	『念仏三昧宝王論』と飛錫遺文の関連性ー長安仏教界の動向を手がかりにー
第 4 章	『念仏三昧宝王論』と廬山慧遠崇拜ー往生伝の変遷と関連ー
第 5 章	『念仏三昧宝王論』に見える飛錫の修道論ー「無上深妙禅門」の概念を基軸にしてー
結章	浄土教典籍としての『念仏三昧宝王論』

序章の「『念仏三昧宝王論』の研究史」では、この 86 年間に日・中で発表された飛錫に関する 3 7 篇の研究がその要点を摘出しながら吟味されている。その研究史を踏まえて、まずは中国学に基づく関連資料の吟味検証を行いながら、飛錫の著作の撰述年代、書誌、遺文資料の収集と分析などの基礎研究を行う。次にそれに基づいて、かつて塚本善隆が提唱した飛錫の各仏教を綜合融和する統合仏教説の思想的骨組を探り、『宝王論』の撰述動機を明らかにする。それによって飛錫とその著作を中国仏教思想史上に位置付けていくと

いう研究目的と方法論が示されている。

第1章「『念仏三昧宝王論』の撰述年代—飛錫の事跡に関連して—」では、第一次資料である碑文、第二次資料である高僧伝、経録、また一切経音義などに基づき飛錫の事跡年表を作成し、各事項に考察を加えている。これによって諸資料の上に確認できる飛錫の活動年代を天宝三年(744)から建中元年(780)の約35年間に絞り込んでいる。特に飛錫の手になる殆どの碑文資料が師の不空滅後に成立していることに注目し、飛錫独自の活動をその時期に見いだしている。その上で撰述年代については、序文に出る長安千福寺内法華道場を司るようになってから「三十年」と在るところが、『千福寺多宝塔碑』を介在させれば天宝三年(744)に当ること、その30年後は不空の寂年である大暦九年(774)に当ることを指摘し、上限を774年、下限を飛錫の事跡として確認できる最後のものとなる温国寺臨壇大徳として代宗へ『謝恩表』を上表した大暦十四年(779)と規定している。この撰述年代の絞り込みは飛錫の事跡や時代状況を検討したところの新たな研究成果として評価できる。ただ下限については論者が別の文脈で述べているように、「大暦九年以降」にとどめておくのも一考であろう。

第2章「『念仏三昧宝王論』諸本の系譜について—その流伝背景と関連して—」では、14世紀に遡る日本の禅林寺に伝わる写本1種、清朝代の刊本3種、中華民国における刊本1種、日本の江戸期(慶安、元禄、享保、安永)の刊本5種を合わせて10種を蒐集し、併せて中国と日本における『宝王論』の受容形態を広範囲にわたり追跡調査している。諸本の系統については嘉興蔵版所収本の底本となった合刻本(15世紀頃)に着目した上で、それが文字の異同がみられる日本の慶安元年版を除く全ての刊本に影響を与えていることを明らかにしている。それに伴って現時点では誤字脱字が少なく、来歴が明確で最古の跋文をもつ嘉興蔵版をテキストとすべきことを提起している。また宋代の官僚である黄伯思が『宝王論』に跋文を残していることに関連して(日本の慶安元年版にも附されている)、宋学の視点から考証された宋刻本の流通を想定し、孤本である慶安元年版がその宋刻本に遡る将来本の系統に属する可能性を示唆している。この一連の書誌的研究は『宝王論』の基礎的研究として高く評価できる。ただ出来うれば諸本の系譜の図式化が望まれる。

第3章「『念仏三昧宝王論』と飛錫の遺文の関連性—長安仏教界の動向を手がかりに—」では、第1節において飛錫遺文現存6種、散逸遺文9種を収集している。そのうち散逸遺文である「南陽慧忠国師碑」については、その本文を『祖庭事苑』によって復元したことは新しい知見として評価できる。また日本の遣唐使一行に附したといわれる『念仏五更讃』について、その内容を窺うことができないものの、大暦年間末頃までには飛錫に念仏思想が確立していたことを知りうる文献であるという指摘は、『延暦僧録』という二次的資料に依るものではあるが注目される。第2節では飛錫が不空滅後も長安仏教界の領袖の一人としてその護国仏教思想を儀礼などを通して継承し、王都平安祈願の一翼を担っていたことを遺文を通して指摘している。第3節では長安における大量動員型の仏教儀礼は宗派間で共有しうる特質を備え、そこに飛錫の調和仏教思想構築の土壌を指摘している。飛錫の『宝王論』に見られる禅学思想の受容と批判の姿勢について、論者はそれを安史の乱の影響によると思われる長安と地方の空気の差異に由来するという見解を示しているが、具体的に検証を要するところである。

第4章「『念仏三昧宝王論』と廬山慧遠崇拜—往生伝の変遷と関連性—」では、廬山慧

遠らによる立誓譚の変遷を靈異伝や往生伝の成立発展過程を考慮しながら、往生人としての廬山慧遠の位置付けが徐々に上昇して行ったことを跡づけている。唐中期になると道鏡・善道の『念仏鏡』、法照の『五会法事讃』（広本）、飛錫の『宝王論』が慧遠を念仏実践の浄土教家として捉えるに至るが、それは浄土教家たちが自らの修道論構築の権威付けとして持ち出したものであろうと指摘している。中でも飛錫の『宝王論』が浄土教祖師としての慧遠像の端緒を開く役割を果たしていたことを指摘している。また論者は飛錫の独自の念仏観がみられる巻中の第十一門「高声念仏面向西方門」を取り上げて、飛錫は廬山慧遠の遺文を浄土教の理論武装として用いていると指摘する。確かに第十一門では二度にわたり遺文『念仏三昧詩集序』を引用するが、では念仏三昧に関する理論的方面の問答がみられる『大乘大義章』が引用されないのは何故かという問題も残る。慧遠と飛錫の間に別のテキストを想定してみることも出来るであろう。

第5章「『念仏三昧宝王論』に見える飛錫の修道論―「無上甚妙禅門」の概念を基軸にして―」では、飛錫の修道論の中核をなすのは廬山慧遠の『般舟三昧経』による念仏三昧であること、同時代の法照は『浄土五会法事讃』（略本）の冒頭において「念仏三昧はこれ真の無上甚妙禅門なり」と語るが、飛錫が修道論の基軸にすえる「無上甚妙禅門」は法照の影響であった可能性が高いと見ている。「無上甚妙禅門」の概念そのものは『般舟三昧経』の異訳である『大方等大集経』賢護分（通称『賢護経』）に遡ること、飛錫は法照の影響を受けこの概念を更に拡大し、当時の長安仏教の通念であった法華三昧不軽の行と自らの信仰である念仏三昧般舟の宗という双方を思想統合する象徴的概念として「無上甚妙禅門」を持ち出したと結論している。また『宝王論』最末尾に引用される「過現未念三世仏はただ清浄微妙禅」にあると説く『賢護経』の偈文に着目し、『宝王論』上中下三巻の構成に関わる念未来仏（三階教）、念現在仏（浄土教）、念過去仏（多宝塔信仰）を包括する思想もこの『賢護経』の範疇で行われた思想統合であったと指摘している。飛錫独自の念仏観である高声念仏について『宝王論』は慧遠の『念仏三昧詩集序』を論拠として持ち出している。これに関して論者は法照の『五会法事讃』（広本）に出る高声念仏や禅典籍『南天竺国菩提達摩禅師観門』に出る大声念仏に検討を加えながら、高声念仏が初期禅宗の東山法門の系統で創始された蓋然性は低く、善導の高弟懷感の「励声念仏」などに基づきながら浄土教儀礼の通念となって行ったものであろうと指摘している。

結章「浄土教典籍としての『念仏三昧宝王論』」では、中国仏教史上の飛錫を代宗の仏教優位時代からその反動への対応として到来する三教調和の時代という、中国仏教変改の遠因となる人物の一人として位置付けている。また『宝王論』については不空滅後もその護国思想、儀礼実践を社会通念の範囲内で許容し継承しながら、自らの浄土教信仰を『般舟三昧経』系統の念仏思想をもって吐露するところにその撰述目的があったと結んでいる。

〔2〕 審査結果の要旨

・飛錫の基礎研究としてその遺文を碑文や墓誌銘の資料を含め現存・散逸にわたって収集し、各資料の歴史的背景や思想史的意義等に考察を加え整理したことは初めての総合的作業として評価できる。それらの資料的価値を高めるために、各資料を校訂し訓読と註解

を加える作業を望みたい。

- ・『宝王論』の現存する諸本を写本、刊本にわたって 10 種（うち 1 種は開卷不能のため未調査）を検討し、中国と日本における流伝と受容形態、また諸本の系統を明らかにした作業は、『宝王論』の書誌学的研究として高く評価できる。この成果を踏まえて『宝王論』のテキストが作成されることを期待したい。

- ・『宝王論』の主題として冒頭の序に出る「無上甚妙禅門」をめぐる、この概念に飛錫の思想統合の立場が表明され、またそこに自身の信仰の内実が込められていることを広範囲の資料収集と文献解説を通して中国仏教思想史上に明らかにしたことは、複雑な飛錫思想の骨組を解明する成果として評価できる。ただ論者のいう「統合」の重点が飛錫にとって政治的・形式的なところにあったのか、それとも信仰的・実質的なところにあったのかについては更なる検討が求められる。

- ・高声念仏の淵源について禅典籍を含めて考察した視点は有益であるが、できれば論者のいう高声念仏の儀礼的機能と、法照の『五会法事讃』で出る高声念仏十徳、延寿の『万善同帰集』に出る高声念仏誦経十徳、あるいは基に仮託される『阿弥陀経通賛疏』に出る高声念仏十徳などに示される高声のもつ修道上の内的機能との関連についても言及が望まれる。

- ・本研究は飛錫思想の骨組みを明らかにしその全体像に迫ろうとした力作である。ただ幾つかの問題点や今後の課題もみられる。まず方法論に関して語られる「中国学」の視点からのアプローチについては、「中国学」の意味内容が明確にされておらず絞り込みを必要とする。論題の「思想史的研究」については、第 4・5 章での論究にとどまっている。『宝王論』全 3 巻全 20 門にわたる思想史的考察によって、飛錫の仏陀観や人間観にも及ぶ全体像の解明を期待したい。また副題にある「統合仏教思想」について、論者は安史の乱によって地方に個別化、分散化、多様化した仏教思想を統合しようとする働きがあったとの仮説を立てているが、それを裏づける検証が求められる。論者は飛錫のような経典翻訳に従事していた者が自身の思想を著作として体系化する事例は中国仏教史上きわめて稀であると見ている。ただ飛錫が筆受として参与したと伝わる『仁王護国般若経』と『大乘密厳経』は護国思想を強調する再訳であり、しかも内道場が訳場であることなどを考慮すれば、筆受や証義という役割についてはなお検討を加えてみる必要がある。飛錫の浄土教信仰の形成については手掛かりになる資料は多くないが、論者が飛錫研究の方法論として継承する塚本善隆著『唐中期の浄土教』に示された長安内の寺院配置図を踏まえて、当時の浄土院や法華道場の配置を再現して飛錫と浄土教の関わりを歴史地理的に探ってみるのも一考であろう。

- ・以上のような問題点や課題が残されているものの、本研究は 2009 年に大正大学の唐中期仏教思想研究会が刊行した『念仏三昧宝王論の研究』という総合研究の成果を、独自に前進させる書誌学的文献学的な基礎研究とそれに基づく新たな知見を幾つも提示した飛錫研究として高く評価できる。よって博士（文学）の学位に値する論文であることを認める。